

お姫様は首輪を取りつけられたまま、恥ずかしそうに自らの衣服のなかから下着を脱ぎだしはじめた。

細くしなやかな足の間から彼女の大事なものを覆っていた布が、滑るようにして取り払われる。

真っ白なワンピース裾をめくると、そこに湿った茂みを携えた女陰の縦筋が姿を現わす。お嬢様は大和の胸に軽く手をつくると、赤黒いペニスの真上にまたがった。

片手で濡れた双葉をめくり、真っ赤に充血する膣のなかを見せつけるようにして、腰をおろしていく。

「ヤマト殿……ヤマト殿の、その硬いオチン×ンで私のオマ×コを突き刺してください……」

たどたどしく卑猥な単語を口にし、泣きそうな微笑を浮かべる。

その表情を見て、彼女を抱くことができるのは最後なのだと大和は思ったが、時折り首輪からつながる鎖がカチャリと音をたてると、プリンスは今だけは自分のものなのだと実感できた。

最後の戯れを楽しむようにして、大和はエリスを見つめた。

「今夜のこの光景……絶対忘れないよ」

「私もですわ。今夜はたくさん私のなかで出してください」

普段は決して自分からは行なわない行為や言葉を、エリスは進んで吐きだしていく。
綻びた蜜壺部分が、亀頭の気配を間近に感じてひくつき、なかからポタリと愛液をこぼれさせ、温かなぬめりを先端に感じる。

エリスは大和の先端にこぼした愛液を指先で伸ばしながら、ペニスの幹部分を片手で撫ぜはじめた。

「ヤマト殿の……いつもより大きい感じがしますわ……」

うっとりとした熱い視線を送り、亀頭部分を指先で揉みこむように握ると、エリスは足をM字型にひろげ、しゃがみこむ形で肉棒に体重を落としていった。

寝そべった大和からは、肉棒に女陰を突き刺されて、無理やりひろげられていくエリスの姿がありありと見える。

ぐにやりとひしゃげられたエリスの肉ヒダが蜜をまといながら、ペニスを埋めこんでいく。ゆつくりとペニスがなかに吞みこまれるたびに、隙間を埋められ逃げ場をなくした愛液が溢れだした。

「んっ……くっ……」

熱く強張った肉棒で膣口を押しひろげられる圧迫感にエリスが小さくうめき声をあげる。男性器を受け入れるために充分に濡れてはいたが、生まれてはじめての騎上位での体位は、膣内でペニスが当たる場所がいつもと違うらしく、挿入に多少戸惑いを

見せていた。

「ヤマト殿のが……突き刺してるみたいですわ……くっ……」

ひたい額に汗を浮かべ、エリスが困ったように微笑む。

やがて弾力性のあるヒップがぺたんくと大和の内太腿に降り立つと、エリスは頬を上気させて口もとを緩めた。

「入りましたわ……全部……」

「うん……」

根元まで完全に埋めこまれ、体重をかけたことによって、秘裂を覆う二枚の肉ヒダが最大限に押しひろげられて二人の間でつぶれる。

「う、動きますわ……」

慎重な眼差しを向けると、エリスが身体を大和の顔のほうへと斜めに傾けた。ワンピースの胸もとから、ブラジャーを身に着けていないたわわな二丘がチラリと顔を出す。

大和は鎖を引っ張り、さらにエリスの身体を前のめりにさせると、その身体を支えるように布地の上から豊満な柔肉をつかんだ。

「あう……くっ……」

お椀形わんのふっくらとした胸に骨ばった指先を埋めこみ、すべすべとした質感の布地

の上を滑るようにしてまさぐっていく。

手のひらには布の裏の乳房が芯を硬くして手のひらにコリコリと擦れながら存在を主張していた。

「あふうっ……ヤマト殿の手でおっぱい弄られるの……大好きですわ……」

あお向けになった大和の上で身体の距離を近づけながら、ペニスの立つ角度に合わせてお姫様はゆっくりと身体を上下に持ちあげはじめた。

プリンセスのヒップと大和の下半身の間で肉のぶつかり合う音がペタンペタンとリズムカルに鳴りはじめる。

今まで自分が主導権を握ってセックスをしていたのだが、今回はお姫様の単独の攻めだ。

首輪をつけたことによって、いつもよりプリンセスの興奮度も高まっているのだろう。膣奥から吐きだされる蜜の量もいつもより多く、すでに二人の太腿の間でローションのようにネチャネチャと音を響かせながら糸を引いている。

「僕がエリスの首輪をつかんでのに、犯されてる気分だよ」

「ふふ……私も首輪をつけられてるのにヤマト殿を犯してる気分ですわ」

少しずつメーターが数値をあげていくように高まっていく射精感も腰の打ちつけ方もすべてプリンセスに主導権がある。

エリスはぐるとヒップだけをまわすように腰をくねらせ、ペニスを大きく膣内で絞りあげた。

ドロドロに濡れたヴァギナが渦に巻きこむようにして肉棒を絞りあげてくる。

「あっ……だめっ……だよエリス……そんな強くしちゃ——」

「ヤマト殿を気持ちよくしてるんですわっ……ふあっ……ヤマト殿が感じると私もたまらないっ……」

快感に顔を歪める大和の表情を恍惚とした顔で見つめながら、エリスはさらに腰を振りあげた。

亀頭が出てしまうのではないかというギリギリまで腰を引きあげ、次の瞬間に体重全体をかけるようにして身体を落とす。

圧迫感から解放され、外気に触れたペニスが一息つくこうとするが、すぐに押しこまれるような感覚に熱が発生する。

ガチャンガチャンと鎖が激しく音をたてる、その下で餅つきをしているようにドンとエリスが子宮口を亀頭に叩きつけた。

「あはあんっ!! ああああっ……身体が、割れちゃいそううう……!!」

夢中になって腰が叩きおろされるたびに、接続部からは白濁した蜜が跳ねあがる。

「だめ……だめだっ……ああっ!!」

